上田高校の 2 年生 116 名が筑波大学を訪問

上田高校の 2 年生 116 名（「環境生命」グループ 38 名＋「テクノロジー（I）」グループ 41 名＋「テクノロジー（J）」グループ 37 名）が 9 月 13 日（火）に筑波大学を訪問しました。この訪問は昨年から 5 年間の予定で文部科学省からの財務的支援を受けてスタートしたスーパーグローバルハイスクール(SGH､長野県では長野高校と上田高校のみ)である上田高校のグローバルスタディーの一環として実施されたもので、「首都圏フィールドワーク」に位置付けられています。

SGH 活動に熱心な優秀な生徒 1 名が将来、国連機関で働きたいので筑波大学の国際総合学類を受験したいとのことで、内堀校長経由で入試に関する情報収集の提供を要請されたことが切っ掛けとなり、上田高校の生徒達が「首都圏フィールドワーク」にて筑波大学を訪問することを知り、私も受け入れ側として見学に「乱入する」ことにしました。

「環境生命」グループ 38 名＋引率教員 2 名は 9 月 12 日に昭和大学薬学部を訪問し、13 日午前中は筑波大学が世界に誇る国際統合睡眠医科学研究機構の柳沢正史機構長（ご父君の故柳沢清史氏は戸倉出身で上田高校の 44-4 期）とそのグループ員による研究紹介と生徒 3 名による課題研究プレゼンテーションがありました。生徒達の課題研究プレゼン内容は私の事前の想像を遥かに超えており、秀逸でした。柳沢教授は私の所属する学位プログラムの教員でもあるのですが、院生の進級試験ではかなり厳しい質問をされますので、心配をしていたのですが、それも危惧に終わりました。しかし、確かに柳沢さんや、助教の方々も指摘された通り、プレゼンの最後は「評論・感想」で終わるのではなく、抽出した具体的課題に対し自分はどう対応するか、自分はどのように貢献するのかを述べることが望ましく、それが明確に述べられていれば、100 点満点だったと思いました（質疑応答で補足はされましたが、初めから組み込んで欲しい所です）。

午後はこれも筑波大学が世界でリーダ―的な位置を占める藻類バイオマス・エネルギーシステム開発研究センターを訪問しました。

一方「テクノロジー（I）」グループ 41 名＋引率教員 2 名は 12 日に日本科学未来館、イワタニ水素ステーションを訪問の後、13 日午前は山浦雄一 JAXA 理事（上田高校 68 期）の紹介で JAXA 筑波宇宙センターを訪問し､午後は筑波大学プラズマセンターを訪問しました。

また「テクノロジー（J）」グループ 37 名＋引率教員 3 名は 12 日に東京都市大学メディア情報学部を訪問の後、13 日午前は「テクノロジー（I）」グループと一緒に JAXA 筑波宇宙センターを訪問し、午後は筑波大学計算科学研究センターを訪問しました。

I グループと J グループに対する大学側による概要説明の後､私は J グループにアテンドし計算科学研究センターを見学しました。40 年前に（当時の）「スパコン」を使って研究をしており、その後日立に在籍した者としましては筑波大学が日立と共同で開発した当時世界最速のコンピュータであった PACS-CS（の残骸）を見ることが出来て感慨深いものがありました。私がアテンドしたラボ・ツアーではプレゼンターの説明不足を補う意味もあり、私が質問し過ぎた感がありましたが、全体にもう少し生徒による積極的な質問が欲しかったところです。

事前調整のために 8 月に筑波大学を訪問された SGH プログラム取り纏めの福井先生から昨年度から実施したプログラム内容、報告書などを見せて頂いたのですが、良くデザインされた内容で「今の生徒は羨ましい」というのが、第一印象でした。

生徒達にも見学の最後に話したのですが、先生方の努力によるこの全員参加型 SGH プログラム（海外研修も実施）の企画・運営は素晴らしく、他の高校生に比べて如何に恵まれた環境にいるかを十分認識して、大学選択を含めたキャリア選択に活用して欲しい所です。生徒達による課題研究プレゼンとその後の質疑応答を聴く限り、十分期待に応えてくれるのではないかと感じました。SGH 校なので上田高校を選ぶと言った生徒もいるとのことで「上田高校の今後は明るい」と感じました。

2016.9.14

筑波大学グローバル教育院　原田義則（65 期）

筑波大学側研究紹介聴講風景

柳沢正史教授と H グループの生徒達